

辻が花

立原正秋

集英社

辻が花

著者 立原正秋

装幀者 朝倉 攝

発行者 陶山 巖

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ十
電話 東京 (二六五) 六一一一
振替 東京 一五六 五三

印刷 大文堂印刷株式会社

一九六七年十二月三十日初版発行
一九七二年九月二十日四版発行
著者との了解により検印を廃止します

定価 五五〇円

目

次

辻
が
花
5

最後の仕舞
67

おんなの足音
115

あ
と
が
き

284

船
の
翳

215

石
楠
花

161

辻
が
花

若宮大路に民芸品の織物を売る店ができたのは二カ月前であつた。店の名を紬屋つむぎやといった。

紬屋とは素朴で直截的な店の名だ、と四郎は店の看板をみたときに思った。ここは民芸織物を売る店でござい、と殊更に強調した様子が見えず、なにげない構えが気持よかつた。

その紬屋に、遠野夕子が勤めている、と四郎が知つたのは、紬屋が開店して間もなくである。夕子は、四郎の母の遠縁にあたる本年三十三歳になるうつくしいひとであつた。夕子は、八年前、ある官立大学でフランス文学を講じていた遠野治雄のもとに輿入れしたが、しかし一年後に夫は官費でフランスに留学し、彼は留学期間がすぎても帰国しなかつた。フランスで女が出来たという話であつた。四郎はこんな話を母からきいていた。

「夕子さん、かわいそうに、遠野家を出るわけにもならず、困っているのじゃないかしら」と四郎の母は言っていた。

「あんなきれいなひとが、たった一年で旦那さんから見捨てられるなんて、ちょっと信じられないことですわ」

と四郎の長兄の兄嫁が応じていた。

四郎がまだ大学に通っていた頃の話で、いまから三年前である。その頃は、こんな話をきいても、たいして気にもとめなかったが、しかし二十五歳になった現在の四郎は、二十五歳で興入れた女が一年後には夫に見捨てられ、以後七年間独りで暮してきたのは、並大抵のことではなかったろう、と思う。

四郎が夕子にあったのは紬屋の前だった。

十一月なかばのひっそりした昼さがり、しきりに桜の病葉がふる若宮大路を駅に向かっていくとき、夕子が紬屋の前で水を撒いているのに出あったのである。

「おや、ここになにしているんですか？」

と四郎は足をとめた。

「あら、四郎さん」

夕子は右手に握っていた柄杓をバケツに入れると四郎と向きあった。

「あたし、ここに勤めているのよ」

夕子は紬屋の看板をさし示した。こっちを向いた夕子の白い顔が午後の陽に照り映えて眩しかった。

「ここに勤めているって……遠野さんのところから出てきたんですか？」

「そうではないのよ。家にもつまらないでしょう。ここ、お友達がはじめたの。だから、や

「すい給料でお手伝い。四郎さんはこれからお勤めさきに？」

「ええ。新聞社の調査部なんてひまですから、いつもいま頃から出るんです」

「およりにならない。お茶をのんでいらっしやい」

夕子はくるっと背を向けると左手にバケツをさげ、紬屋のガラス戸をあけた。

このとき四郎は、夕子が締めている帯に目をとめた。大絞りの紺地に、花の描き絵や刺繍、箔をほどこした多彩な帯だった。多彩でありながら、きらびやかではなく、沈んだ美しさを湛えた染物だった。ふだん母や三人の兄嫁たちの着物姿を見なれている四郎にも、この帯は珍しかった。

この帯が辻が花だった。四郎が辻が花だと知ったのは翌年の春である。

四郎は夕子に躓いて紬屋に入った。三坪そこそこの店内に、紬の織物がびっしり詰まっており、夕子の友達だろう、奥の二畳敷きの板の間で、すこし顎のしゃくれた女が伝票を前に算盤をはじいていた。

「こちらは小原静子さん。わたしの女学校時代からのお友だち。こちらはわたしの親類の諸田四郎さん。いま新聞社に勤めているの」

と夕子が二人を引きあわせた。

夕子は水色の紬の着物をきており、静子は紅色のやはり紬の着物をきていた。四郎は静子に挨拶しながら、ずいぶん華やかな店だ、と思った。三十三歳の女二人がやっている店だから華やか

にはちがいなかったが、それにもまして二人の着物が華やかだった。

四郎はこの目からときどき紬屋に寄るようになった。

小原静子は、出版社に勤めていた夫に一年前に死なれ、二児をかかえて紬屋をはじめたのことであった。

「かわいそうな人なのよ。あのとして未亡人だなんて」

ある日たちよった四郎に夕子が言った。この日、静子は、子供の学校に出かけていなかった。

「自分のことは棚にあげているんですか。うちのおふくろは、夕子さんがかわいそうだ、としよっちゅう言っていますよ」

「お母さん、そうおっしゃっているの？」

「それから、うちの兄貴は、あれは蛇の生殺しのような状態だ、と言っていました」

「あら……」

夕子は不意に顔をあからめ、あわてて目を逸らした。どこか一カ所未熟のまま女になってしまった、そんな感じがした。夕子の生家は雪の下にあり、四郎の家からはど遠くない場所だった。

このひとの美しさはどこにあるのだろう、と四郎は夕子にあうたびに考える。むかいあって話しているときより、別れてからの方が、こちらに印象をのこすひとだった。春の日に幽かに匂う水仙の花、夕子にはそんな美しさがあった。

夕子の夫の遠野治雄が帰国したという話であった。しかし彼は家には戻らず、ホテルに泊り、大学に辞職の手続きをすませ、出版社から印税を受けとると、一週間目には羽田を發った、ということであつた。印税というのは、彼がフランスから日本の総合雑誌に書き送った〈中世の旅〉と題する旅行記を一冊にまとめた本の印税であつた。

夕子のまわりの人が彼の帰国を知つたのは、彼が羽田を發つた日であつた。

「実にけしからん奴だ、とさすがに藤岡でも怒つていたわ」

と四郎の母が言つた。藤岡は夕子の生家の苗字である。

「離婚するより他に方法がないだらう、そんな調子では」

と四郎の父が言つた。

四郎がこの話をきいたのは二月の末である。彼はそれから数日後に紬屋によつてみた。

店には静子しかおらず、夕子は千葉県に唐棧ちやんを仕入れに出かけたということだつた。

「問屋から仕入れず、直接生産地から仕入れるんですか？」

「南部紬のように遠く岩手県まで行かなくっちゃならないところは、問屋かあるいは産地から送

ってもらいますが、近いところは仕入れにまいますの」

「夕子さんが品物を背負ってくるわけですか？」

「五反ほどですから、たいした荷物ではございませんのよ。夕子さん、あまり出つけないでしょう。ですから、よその土地に行くのがうれしくてしょうがないらしかったわ」

静子はわらいながら答えた。

四郎は、夕子に身最肩するような質問をしたことを恥じ、しかし、いったい、どういうつもりなんだろう、と思った。夫がフランスから戻ってきて、妻にも逢わず、自分の父母にもあわず、一週間目には再びフランスに発ってしまったというのに、のんきに織物を仕入れに行っている女の神経が、四郎には理解しかねた。

それから数日して四郎は再び紬屋をのぞいた。この日は、前夜、社で泊ったので、帰宅の途中だった。

うすら寒い日のおせい午後で、紬屋の店内では紬の反物が冴えて見えた。

「おや、今日は小原さんがいないんだな」

四郎は店に入ると、夕子を見て言った。

「静子さん、今日は、亡くなられた旦那さまのお墓参り」

と夕子は答えた。夕子は大島紬に白っぽい帯をしめていた。帯は帷子地の染模様だった。これ

はちょっと珍しい帯だった。

「お墓は鎌倉ですか？」

「いいえ、東京の世田谷」

「このあいだ寄りました。千葉に反物の仕入れに行かれたとか……」

「ええ。つまらないから小さな旅行をしてきたの」

「わかりませんねえ。遠野さんがフランスから戻ってきて、自分の家には寄らずに行ってしまったというのに……」

「しかたがないのよ」

夕子はふっと視線を逸らした。

「どうしてですか？　しかたがないというのは、どういうことですか？」

「あの人が帰ってくることは、わたしだけが知っていました。大学のお友達が知らせてくれたのです。でも、わたし、あの人の両親にはそれを知らせなかったの。あの人は、そのお友達によこした手紙のなかで、家には帰らず、用件だけ済ませたら直ぐフランスに戻るから、家族には知らせないで欲しい、と書いてあったのです。そのお友達は、その手紙をわたしに見せてくださったの。……わたし、そのとき、あの人とわたしは別れなければならない、と感じたのです。……永い年月でしたが、これでやっと諦めがつきました」

夕子はきつい表情で言った。

「帰ってくる日がわかっていたのなら、やはり逢って話をした方がよくはなかったですか。どうも判りませんね」

「それがだめだったのよ。わたしもそう考えたの。……でも、あのひと、フランスの女をとまなつて帰ってきたんですもの」

「フランスの女を？ そりゃひどいですね」

「ほかの女と泊っているホテルになど、わたし、とても行けなかったわ。……ほんとのことを言うと、四郎さん、わたし、ホテルまで行つたの。そこで、フランスの女と来ていると知らされ、だまつてホテルから出てきたわ。女って……不思議な感情の動物なのよ。わたしがあの人といっしょに棲んでいるのなら、わたし、ためらうことなしにホテルの部屋に飛びこんで行けたと思うわ。……でも、こんなに永い年月いっしょに棲んでいないと、諦めの方が先にたつものよ。子供が一人いるという話だったわ。もう、わたしとは別の世界で家庭を築いている人……そんな遠さを感じたわ」

「逢ってひとこと懣みを述べればよかったのに」

四郎は自分のことのように言った。

「そうね。……でも、わたし、そのとき、ぶつっと糸が切れてしまったように感じたの。四郎さ